



WORLD REPORT

インド系移民の生き方から見る、自分の未来を選び取るヒント

これから先、どの場所で、どう生きるか
世界最先端があふれる湾岸アラブ諸国と、そこで生きる人たちを通して考えてみる

湾岸アラブ諸国とは、ドバイのあるアラブ首長国連邦、クウェート、サウジアラビア、カタール、バーレーン、オマーンの6か国のこと。そこはあらゆる分野における世界最先端が詰まった場所であり、グローバルに動き続けるインド人のバックグラウンドがわかる場所でもありました。なぜ、彼らの多くは世界のさまざまな場所で活躍することができるのでしょうか。湾岸アラブ諸国に渡った中間層のインド系移民とそこで生まれた移民の子どもの調査を続ける松川恭子教授が未来の生き方のヒントについて語ります。

生きる術を獲得し、ステップアップを続ける フィールドは世界

湾岸アラブ諸国で生まれたインド系移民の子どもは、早ければ日本の小学生にあたるころから自分の能力を意識し始めます。そして、世界のどこに行っても仕事を獲得することができる技術や知識を獲得するため、マーケティング分野やIT分野を勉強したり、MBA(経営学修士)を取得するなどし、グローバルに移動できる可能性を広げていきます。そもそもなぜ、このように早くから将来の学びを考えるのでしょうか。その大きな理由が「移民」の制約にありました。

文学部 社会科学科 教授
国際交流センター所長
まつかわ きょうこ
松川 恭子

大阪大学文学部日本学科卒業、同大学院人間科学研究科博士課程修了、博士(人間科学)。専門は文化人類学、南アジア地域研究。奈良大学社会学部を経て、2016年より現職。2021年より国際交流センター所長。インド西部ゴア州をフィールドに多言語状況の調査中に湾岸アラブ諸国に移民した人たちの話を聞き、アラブ首長国連邦・クウェートでの調査を開始。趣味は家で飼っている手乗りのセキセイインコと遊ぶこと。最近のインド映画だと話題の「RRR」がお勧め。



世界最先端も 日本の別の側面も見える 湾岸アラブ諸国

湾岸アラブ諸国には、あらゆる分野において最先端の動向が見られます。都市計画においてサウジアラビアではTHE LINEというスマートシティ計画が進行中。幅200m、全長170km、高さ500mの直線型都市で、ここでは居住者の個人情報を集約し、すべてをIT管理することで、先進的な生活が実現可能といわれています。また、湾岸アラブ諸国の教育分野では、世界中の大学から海外分校を受け入れ、続々と設立。教育のグローバル化が加速しています。

停滞しているといわれている日本経済ですが、湾岸アラブ諸国に活躍の場を広げている企業もあります。建設分野では、実は日本企業が多数進出。ドバイのメトロ建設も日本企業が建設を請け負っており、利益は日本に還元されています。若者の車離れが嘆かれている自動車産業においても、クウェートでは日本産高級車が多数走行。巨大なシヨールームもそびえ立っています。もし、就職活動でめざす業界があるなら日本市場だけを見るのではなく海外市場まで



松川教授がインド調査中に玩具屋で購入したタクシーのミニカー。実際に町を走行しているが、昔ながらの三輪タクシーは減少傾向。

視野を広げる必要があります。ドバイは人口の90%以上、クウェートは70%以上が外国人であるなど、自国民よりも移民のほうが多い「多外国国家」であり、異文化が混在するグローバル社会です。社会を動かしている多くが移民であるのもグローバル社会の最先端といえるのではないのでしょうか。日本も労働力を外国人に頼り始めていますが、外国人と共生する社会もそう遠くはなく、学ぶところも多いと考えることができます。

世界をフィールドにしたキャリア設計や生き方を考えたとき、もはや欧米諸国の情報だけでは不足です。グローバル教育が広がりを見せる日本ですが、義務教育で学習する言語が英語のみというのも、すでに時代にそぐわなくなってきました。英文法や英単語を細かく学ぶよりは、もう1言語を加えて学ぶほうがグローバルに活躍できるチャンスが広がります。人気の韓国・朝鮮語、国力が上がってきているインドネシア語などにも目を向けてみると良いと思います。

人生百年時代 世界を見たらうえで、 どこで、どう生きるか

遠く離れた海外の暮らしを実際に見て、自分の住む社会に立ち返る。世界中にある生き方を知り、自分の人生を見つめ直す。いつしかライフスタイルまで変わってくる。これが私の研究している文化人類学の面白いところ。

留学では自分の常識が通用しない社会で暮らし、失敗を重ねることで新しい方法を確立したり、おもてなし精神や奉仕の心



松川教授の著書、共編著書。最近、注目されつつあるポリウッド映画や、2011年国勢調査で121言語が確認された多言語社会インドについて、人類学の観点から考察。

彼らの親世代であるインド系移民第一世代の多くは、1970年代のオイルブーム(石油価格高騰)の際、湾岸アラブ諸国に出稼ぎ者として移住してきました。しかし、いくら長く住んでも湾岸アラブ諸国のほとんどの国では、移民政策により国籍を得られません。ビザも数年ごとの更新が必要。職を失えばビザを剥奪され、早い場合は翌日にインドに帰らなければなりません。住み続けられる保証はなく、インド系移民の暮らしは常に不安定。子どもたちも早くから「安心して暮らせる場所を見つけたら」より安定した仕事に就きたい「高い能力を身につけるため進学したい」と願うようになります。この切実さが彼らのグローバルな活躍の根底にあるのです。

しかし、子どもたちが湾岸アラブ諸国のインド系学校に通えるのは、日本の高校卒業にあたる12年生までで、移民は大学進学をどこでするか選択する必要があります。もし親に経済力があればアメリカやヨーロッパの大学に進学したり、湾岸アラブ諸国内に設立された海外の大学の分校に進学が可能です。アメリカやヨーロッパでは卒業後に職を得てうまくいけば永住権獲得をめざすことができます。しかし、大半はインドに渡り学費が比較的に安い大学に入学します。インドで就職する人もいますが、インドは人口が多く競争が激しいため、結局は湾岸アラブ諸国に舞い戻り、親と同じように移民の立場のまま就業する人も多数いるのが現状です。しかし、彼らはいずれの道に進んでもより良い条件の就労先があればアメリカやヨーロッパなど世界中をフィールドに転職していきます。これがインド人が世界各国で存在感を高めている一つの要因なのです。